あとがき

本書は、哲学の歴史についての概説書である。哲学史の理解が哲学入門の必須条件であるとすれば、本書はまた、哲学という学問への入門書だと言うこともできる。

もっとも本書は、一般的な概説書・入門書とはやや趣を異にしている。というのも、私が本書で取り組もうとしたのは、（ちょっと長い「まえがき」としての序章で述べたように）さまざまな哲学者が差し出した寓意や比喩を蒐集して、「哲学におけるイメージの系譜学」とでも言うべきものを作ることだからである。よく知られているものもあるが、言葉の森にまぎれて見過ごされてきたものもある。それらのなかから、手掛かりとして役に立つものをピックアップし、古典的な哲学文献を系統だてて読み解いてみようというのが、本書の趣旨である。

この作業は、ただ単に哲学の入口へと初学者を導くだけのものではないと私は考えている。それはまた同時に、哲学思想の核心部へと至る道にもなるはずである。それぞれの哲学者が差し出すイメージは、各人の思考様式と密接に結びついており、その思想の原初的な深部を形作っている。哲学事典の項目にあるような難解な術語がまず先に哲学者の頭のなかにあったわけではない。はじめにイメージがあり、術語による概念化はそのあとのことなのである。

ともあれ概説書であり、入門書であるからには、本書は読者として、哲学の専門家ではない人たちを想定している。これから哲学を学ぼうとしている若い大学生諸君。あるいは定年を迎えて、人生の意味を問い直そうとしている団塊世代の人たち。そういう人たちが本書を手にとってくれればと願っている。

その意味では、本書は当然のことながら、「哲学の専門家」を読者としては想定していないのだが、……しかし、である。つらつら考えてみると、今の日本に「哲学の専門家」と呼べる人がはたしてどれだけいるだろうか。たしかに、「プラトンの専門家」や「アリストテレスの専門家」はいる。「カントの専門家」や「ヘーゲルの専門家」もいる。だが、「プラトンの専門家」や「アリストテレスの専門家」が、同時に「カントの専門家」や「ヘーゲルの専門家」でもあるのか、「カントの専門家」や「ヘーゲルの専門家」が、同時に「プラトンの専門家」や「アリストテレスの専門家」でもあるのかというと、いやいや、そうではない、というのが、残念ながら日本の（あるいは世界の）哲学研究の現状である。

昔から言われていることだが、アカデミズムにはタコツボ化の現状があり、その傾向はいっこうに衰えをみせない。「プラトンの専門家」や「アリストテレスの専門家」がカント哲学やヘーゲル哲学に関してはズブの素人であり、「カントの専門家」や「ヘーゲルの専門家」がプラトン哲学やアリストテレス哲学に関してはズブの素人であるという現状。これが否定しがたいアカデミズムの実状であるとすれば、本書は、そういう――「素人」である限りの――彼ら・哲学研究

者をも読者として想定せざるを得ないことになる。私は本書で、プラトンからヘーゲルまでの哲学の歴史を論及の対象にしたが、テーマをこの範囲に限定したのは、「読者が哲学の研究者であっても、読むに耐えるものを」と考えた結果、（おのれの力量からして）おのずとそうなったということである。「哲学におけるイメージの系譜学」を提供するという意味でも、本書は初学者だけでなく、（概念の森を探索することに慣れた）哲学研究者にも興味深い思索の素材を差し出すことができるのではないかと思う。

私は現在、「倫理学」の分野に所属する大学教員として、学部（私が勤務する筑波大学では、これを「学群」と称する）や大学院で、「西洋倫理学」や「現代倫理学」を講じている。それ以前には（つまり若かりし頃には）、「ヘーゲルの専門家」だった私は、「哲学」の分野に所属する教員として、「西洋哲学」や「西洋哲学史（近代）」を講じていた。

今、その頃のことを想い起こすと、内心忸怩たるものがある。当時、私は、たいていの西洋哲学史の概説書――それはどれも似たり寄ったりだった――に書かれているような言葉で、哲学史の解説を行っていた。ありきたりの言葉で哲学の歴史について語りながら、私はそのような自分に、そこはかとない違和感を感じていた。忸怩たる思いとは、その違和感に真剣に向き合わなかったことである。聴き手が哲学研究者の予備軍だったとはいえ、私の言葉は彼らにどこまで届いていたのか。いや、哲学の歴史について語る私自身が、どこまで哲学の歴史を理解していたのか。

今の私が哲学の歴史について語るとしたら、たぶんそういう安直な言葉では語らないだろう。

本書は、（未熟だった）過去の自分に対する、大いなる反省の念が生み出したと言ってもよい。そのようなことを振り返ると、本書を（私の勤務校と縁の深い）筑波大学出版会から上梓できることは、著者として大きな歓びである。いちいちお名前をあげることは控えるが、お世話くださった関係者の皆様にはこの場を借りてお礼を申し述べたい。

二〇〇八年十一月

笹澤　豊